

フィッシャーウーマンと

スパイス・ウーマン——女・子ども・精霊

皆川美恵子

児童文学の中で女性がどのように描かれているのか、二つの作品を手がかりにしながら、女性の生き方を見渡してみたいと思います。二つの作品は、単純明快にタイトルに“ウーマン”と付けられています。内容は奥深く、何度読んでもその度に考え込まれてしまいます。児童文学を手にして考え込むというのは、人によってはおかしな読み方と思われるかもしれませんが、私はいつも児童文学を考え込みながら読んでいます。

最初の作品は『フィッシャーウーマン』という絵本です。ルイス・ブリアリーの絵、アン・カーターの文、共に女性です。原作は一九九〇年にイギリスで出版され、二年後に『海のおくりもの』という邦題でセーラー出版から刊行されました。あらすじは次のようなものです。

海辺の村にモードという名の女性が一人、昼は浜で貝や海草を採り、夜は舟を漕ぎ出し、魚によって暮らしています。フィッシャーマンならぬ、フィッシャーウーマンというわけです。このモードは、美しく着飾って高台の屋敷で、人々と楽しく語り過ぎ夢を抱いていました。そんなある夜、網によって海からピンク色の壺を引き上げます。その壺を家に持ち帰り、嵐の夜、雨漏りの雨を受ける器として用いたところ、朝になると壺の中から蔓がのび、花を咲かせ、実をつけます。その実はまるでピンク色の帽子のよう、次の朝は、ピンク色の靴のような、三日目の朝は、ピンク色のドレスのよう

な実が着いています。モードは着飾って散歩をすると、そのお洒落に目をとめたお金持の奥様から高台の屋敷でのパーティに招待されます。

パーティに集う人々の、質素な村人を蔑む言葉に、モードは、自分の居場所や、魚をとって暮らす自分の生き方に気づき、海辺の村へと逃げ帰ってきます。そしてドレスをほどき、帆へと縫いあげ、海へ出てピンク色の壺を、海へ沈め、漁を続けます。

成人に達し、漁師としての仕事に生きる女性が、あらためて漁師の仕事をはっきりと自覚的に選び取り、〈衣裳〉から〈帆〉への転換をしています。海からの贈物を〈帆〉という風を受ける力へと転換する生き方が、見事に表現されているといえるでしょう。ストーリーも魅力的ですが、絵がとびきり素晴らしく、フレスコ画のような淡々しく優しく美しい色調で、有元利夫の画に似たような上品な静けさが漂い、内面世界の風景を描いているかのような画面です。

もう一つの作品『スパイス・ウーマン』も紹介してみましよう。この作品はイギリスのファンタジー作家として著名なアリスン・アトリーの短篇物語です。三保みずえさんの訳によって評論社から刊行された、『妖精のおよめさん』という本に収録されています。

世界を巡り歩いてスパイスを集め、スパイスを売っているおばあさんがいます。毎年一回、おばあさんは、ベッシーという娘が台所女中として働く宮殿へとやってきます。「ナツメグ、シナモン、ジンジャーに、ヒメウイキョウの実はいかが……」という歌声が聞こえ出すと、一年目の時は、ちょうどナツメグが木箱に空っぽで、ベッシーは急いでナツメグを買いに行かされます。ベッシーが丁寧にお辞儀をすると、おばあさんは、これはベッシーのナツメグだよと一つの実をプレゼントします。二年目はシナモン、三年目はジンジャー、四年目はヒメウイキョウと、物語の定石通りに繰り返しが起こります。

さて四年が経過して、見習いのベッシーは料理長のダンブルドア夫人に気に入ってもらえず、お払い箱にされてしまいます。ベッシーのトランクの底には、おばあさんから特別に贈られた四種類のスパイスが仕舞い込まれました。そのトランクを持って故郷に帰ろうと、塔の上の部屋の窓から外を見

た時です。おばあさんが歩き去っていく姿が見えました。スパイス・ウーマンである、そのおばあさんの姿は、次のように描写されています。

——「ずっとむこうの白い道路を、ちっぽけな人の姿がどんどん遠ざかっていくのが見えました。カゴをさげて杖をつきつき歩いている、スパイス売りのおばあさんです。けれども、年寄りのような歩き方ではなく、若い娘のようにきびきびと歩いています。まるで悩み事がすっかり片づいて、いつの間にか、また若返ってしまったようでした。しかも若さにつきものの悲しみや貧しさはなく、そのかわりに欲びと豊かさだけがあるように見えました。」——

ベッシーは故郷に帰り、いつまでもみずみずしいスパイスを庭に植えてみます。すると芽が出て、みるみると大きくなり、四本の木となり、花が咲き、実がなり、素晴らしい香りを放ちます。物語の最後で、ベッシーをひそかに愛していた宮殿の番兵さんと、ベッシーは結ばれるのですが、その時、ベッシーにだけ、忍びやかにスパイス・ウーマンがやってきて、「愛」というスパイスを届けてくれたことを観ることができます。

アトリーのこの物語は、「パセリ、セージ、ローズマリー、タイム」を歌い込んだ、有名なマザー・グースの歌や、それをもとに作曲されたサイモンとガーファングルの「スカボロー・フェア」を想い起こさずにはいません。

先のフィッシャーウーマンは、仕事を選びとる女性の生き方が、片やスパイス・ウーマンは、人生で至難の恋愛の成就を達成する女性の生き方が描かれています。仕事か恋愛か、人生におけるこの二つの宝を獲得するには、海という未知の世界との交信によったり、スパイス・ウーマンという妖精のような不思議なおばあさんとの交流によったりと、《精霊》^{スピリット}の存在が介入していることを伝えているかのようです。精霊とは、ここでは簡単に、人間の感覚を強く揺さぶって、生命の息吹きを与えてくれるもの、それも、直観的な認知によってしか感受できない生命の力と、理解してみたいと思います。二つの話では、生命の息吹きを運んでくれたのは、夜の海の底から引き上げられたピンク色の壺であったり、また漂泊している老女というように、女性イメージで語られています。そして、衣裳とか

料理といった、女性の生活に強く結びついてもいます。二つの話には、蔓草やスパイスの木という植物シンボルが、不可思議な生命の力として魅惑的に生い茂っています。

紹介しました二つの物語には、モードという大人の女性と、ベッシーという若い娘と、スパイス・ウーマンという老女と、三つの世代の三人の女性が登場しています。そして三人の生き方が世代ごとに異なっていますが、《精霊》と深く結びつけられて、印象的に語られています。

さて、文化人類学者のコリン・ターンブルは、ライフ・サイクルについて考察した著作『豚と精霊』（どうぶつ社）において、人間が生まれてから成長し、死を迎えるまでの過程において、それぞれの段階で、どのような潜在能力が発揮されようとしているのか洞察を試みています。それは次のようにまとめられています。

(1) 子供時代 それは自己と他者を感じる時

「羽化の技法 (art of becoming)」によって、他者との関係の中で自己について学ぶ。

(2) 思春期 それは性の魔術を自ら知る時

「転成の技法 (art of transformation)」によって、身体的な成熟の喜びを発見し、社会的な自覚について学ぶ。

(3) 青年期 それは知識を叡智に変える時

「理の技法 (art of reason)」によって、身につけた知識を適切に用い、社会的な責任を果たすために活用する。

(4) 成年期 それは自己表出としての営為をなす時

「営為の技法 (art of doing)」によって、自分の本性に応じて精一杯、社会的存在として生きる。

(5) 老年期 それは妖術師として変身する時

「存在の技法 (art of being)」によって、精霊の力を叡智として生きる。

ベッシーは思春期にあり、モードは成年期にあり、スパイス・ウーマンは老年期にあるといえるでしょう。若い方々は、仕事に生きようか、恋愛によって家庭人になろうかなど、もしかするとそこに関心を抱くのかも知れません。しかし、私は現在、特に老年期について考え込んでいます。スパイス・ウーマンの謎めいた生き方が気になってならないのです。ターンブルは、老年期についての章で、老人は死に近接しているゆえに、死の向うにいる〈精霊〉の力を持つているとか、老人は〈精霊〉に親しみ、〈精霊〉と共に生きるようになっていく、と語っています。子どもから老人に至るまでこの段階でも、〈精霊〉との結びつきが大事で、神聖なるものと共に生きている感覚こそが、真に他者との共同体的な結びつきや、かけがえのない人生の崇高さにつながることをターンブルは説いていますが、老人は自らが精霊的になっている、強く強く〈精霊〉と結び合わさっているという指適に、私はドキドキしてしまいます。

そしてターンブルは、老人が精霊に近づいたゆえの、精霊のパワーによって生きる生き方に、次の四つのタイプがあると述べています。

- (1) 好々爺（おばあさんも含めての、子守り上手の老人）
- (2) 妖術師（ウィッチ）
- (3) 賢者（ワイズ・マン、ワイズ・ウーマン）
- (4) 聖者（セイント）

現代は、孫やひ孫など子どもと共に生活する老人は少なく、老人のパワーが幼い子どもに向かうことがなく、子どもを見守るといふ文化はすたれつつあります。私の身の廻りには、ウィッチのようなお婆さんや、さらにはそのパワーを個人的な感情の利害によって用いる、邪術師（ソーサリー）と呼ばれるような困ったお婆さんも多く、そのどこか不調和な、およそのびやかに、その人の可能性を実現しているような老人の人生とは思えずに、悲しい気持ちにさせられます。

スパイス・ウーマンのように慈愛のエネルギーを放射するお婆さん、つまり賢者や聖者になるのはどうしたらいいのでしょうか。神聖なものに対する信仰こそが、精霊への感性を鋭敏にして、「生」

の連続性という大きな自我の社会性へとつながっていくと、ターンプルは提言しています。現実にはなかなか出会えないような、大きな自我をもったおばあさんですが、実は児童文学の中には、そのような生き方をしているおばあさんが、たくさん描かれています。子どもの「生」と深くかかわっているおばあさん、子どもに物語をたくさんするおばあさん、子どもの神秘に対する感情を刺激してやまないおばあさん、八〇日間で世界一周の冒険までさせてしまうおばあさんなどなど。児童文学の世界には、子どもも多く登場しますが、それはそれは魅力的なおばあさんだらけなのです。人生の半ばへと到達した私は、たくさんの児童文学の作品によって、叡智をもって生きるおばあさんの、「存在の技法」を学んでいるかのようなのです。

(みなかわ みえこ・十文字学園女子短期大学・児童学)

*一九九四年二月八日「総合科目・女性論」での講演をもとに寄稿いただきました。